

## 現代青年の友人関係のあり方と「ランチメイト症候群」傾向の関連

岡田 努(金沢大学)

tokada@staff.kanazawa-u.ac.jp

### 問題と目的

#### [ランチメイト症候群]

近年、友だちがいないと思われるのがいやで、(トイレの個室などで)隠れて食事をとるといった青年の姿がマスメディアなどで報じられている。

町澤(2001)は、昼食を一緒に食べる相手(ランチメイト)がいない事態を恐れたり、一人で昼食を食べる姿を見られるのが怖いと訴えるこうした青年を「ランチメイト症候群」と呼んでいる。

このように食事をする相手を何としてでも見つけようとする背景には、友だちがいないと他者から見られてしまうといった他者の視線を強くプレッシャーに感じる現代青年の特徴があると辻(2009)は指摘している。

#### [ふれ合い恐怖との関係]

一方、現代の青年に特有に見られる対人恐怖の型として「ふれ合い恐怖」という症状が注目されている。これは、従来の対人恐怖が、人と人が出会い顔見知りになる場面(出会い場面)において発症するのに対して、「ふれ合い恐怖」の青年は、顔見知りからより親密な関係に発展する場面(ふれ合い場面)での困難が中心となるとされており、とくに友人などの会食や雑談場面での困難が中核的な症状とされている(山田・安東・宮川・奥田,1987;山田,1989)。岡田(2002)は、ふれ合い恐怖のうち「対人退却」下位尺度得点が高い群においては、会食や雑談などの状況、場面に関して安心感が低いことを見出した。このように、ランチメイト症候群とふれ合い恐怖は、いずれも食行動への困難という点では共通している。

しかし岡田(2011a)は、ふれ合い恐怖の青年が、他者からの視線や評価の圏外に身を置くのに対して、ランチメイト症候群の青年は、他者の視線や評価に過剰に反応し翻弄されている点で異なっているとしている。すなわち、ふれ合い恐怖の青年は他者の評価の及ばない孤食場面で安定するのに対して、ランチメイト症候群では、やむを得ず孤食に陥っているものの、その状態に必ずしも安定してはいないと言えよう。岡田(2011b)は現代青年の友人関係について、自分が傷つけられる恐れに基づいて、相手を傷つけないように気を遣うことによって、低い被拒絶感と高い被受容感を通じて、自尊感情を高揚・維持する傾向を見いだしている。

本研究では、ランチメイト症候群傾向を測る尺度を作成すると同時に、ふれ合い恐怖との異同を検討し、またそうした傾向を持つ者の、他者の視線に対する態度、友人関係のあり方、その結果としての自尊感情などの特徴について探索的に検討する。

### 方法

調査対象者 首都圏、甲信越、近畿圏、北陸の4年制大学生1~4年生(不明1).18歳~25歳 有効回答数 506名(男子 227名, 女子 279名)

以下の尺度項目について 全くあてはまらない(1点)から、とてもあてはまる(5点)の5段階評定で実施した。

- 1)ランチメイト症候群傾向に関する尺度項目 昼食時間不安項目(佐藤・畑山,2002)より3項目「昼食を一人でとっているのを友人に見られるのはいやだ」「学内で昼食を一人でとるのはつらい」「昼休みに一緒に過ごす人(達)がいると安心する」に加え、5項目を新たに作成し追加した。
- 2)友人関係で傷つけ合うことを避ける傾向についての尺度(以下「傷つけ尺度」と略称) 岡田(2012)で作成された尺度で、「傷つけられ回避」「距離確保」「礼儀」「傷つけ回避」の各下位尺度からなる。本研究ではこのうち「礼儀」を除く3つの下位尺度を用いた。
- 3)ふれ合い恐怖尺度 岡田(2002)において作成された尺度で、「対人退却」「関係調整不全」の下位尺度から成る。

4) 自己意識尺度 Fenigstein, Scheier, & Buss (1975) の Self-consciousness scale を菅原 (1984) が邦訳・再編した自己意識尺度 21 項目。自分自身に意識が向きやすい傾向(私的自己意識)と, 他者から見られた自分に意識が向きやすい傾向(公的自己意識)の下位尺度から成る。

5) 自尊感情尺度 Rosenberg (1965) が作成し山本・松井・山成 (1982) が邦訳した 10 項目のうち, 「もっと自分自身を尊敬できるようになりたい」を除いた 9 項目を用いた。いずれも全くあてはまらない (1 点) から, とてもあてはまる (5 点) の 5 段階評定であった。

### 結果と考察

ランチメイト症候群傾向の尺度項目について度数分布を検討したところ, 「一人で昼食を食べずに済むように, 親しくもない人を誘うことがある」「昼食は人に見られないように隠れて食べる」の 2 項目については「1 全くあてはまらない」「2 あてはまらない」までの累計頻度が 85.0%, 87.9% と大半を占め床効果が顕著なため, 検討対象から除外した。残りの項目について最尤法による因子分析を行ったところ固有値 1 以上で 1 因子構造が確認された (Table 1)。Cronbach の  $\alpha$  係数は  $\alpha = .891$  であった。

Table 1 ランチメイト症候群傾向 因子負荷量

一人で昼食を食べるのは恥ずかしい b	.897
学内で昼食を一人でとるのはつらい a	.875
昼食を一人でとっているのを友人に見られるのはいやだ a	.852
一人で昼食を食べていると「友だちがいない人間」だと思われそうな気がする b	.742
友だちがいない人間だと思われるのはつらい b	.572
昼休みに一緒に過ごす人(達)がいると安心する a	.550

注:a 佐藤・畑山からの項目, b: 今回新たに作成した項目

合成得点について他の変数との相関を求めた (Table 2)。その結果, 「傷つけられることの回避」との相関は  $r = .19 (p < .01)$  と有意ではあるが高いとは言えない値であった。一方公的自己意識との間には  $r = .44 (p < .01)$  と比較的高い相関が見られた。またふれ合い恐怖の「対人退却」とは負の相関 ( $r = -.24, p < .01$ ) が見られた。自尊感情との間では  $r = -.186 (p < .01)$  であった。以上のことから, ランチメイト症候群傾向の青年は他者の視線は強く意識しているが, 友人関係で傷つけられないよう回避もせず, 対人関係から退却もしない, 不安定な状態に留まる青年群であることが示唆された。

Table 2 ランチメイト症候群得点と他の尺度得点の相関

傷つけられ回避	距離確保	傷つけ回避
.194**	-.090*	.159**
公的自己意識	私的自己意識	自尊感情
.440**	-.102*	-.186**
ふれあい恐怖的心性		
関係調整不全		対人退却
.223**		-.240**

一方、床効果が見られた2項目について高得点(4 ややあてはまる 以上)であった回答者のランチメイト尺度合成得点の分布と、調査対象者全体の分布を Figure1 に示した。ここに見られるように、除外した2項目はほぼ尺度得点の高得点側に集中していた。よってこれらの2項目も、反応が小さく尺度に組み込むことは困難ではあるものの、共通の特徴を測っていると考えられる。

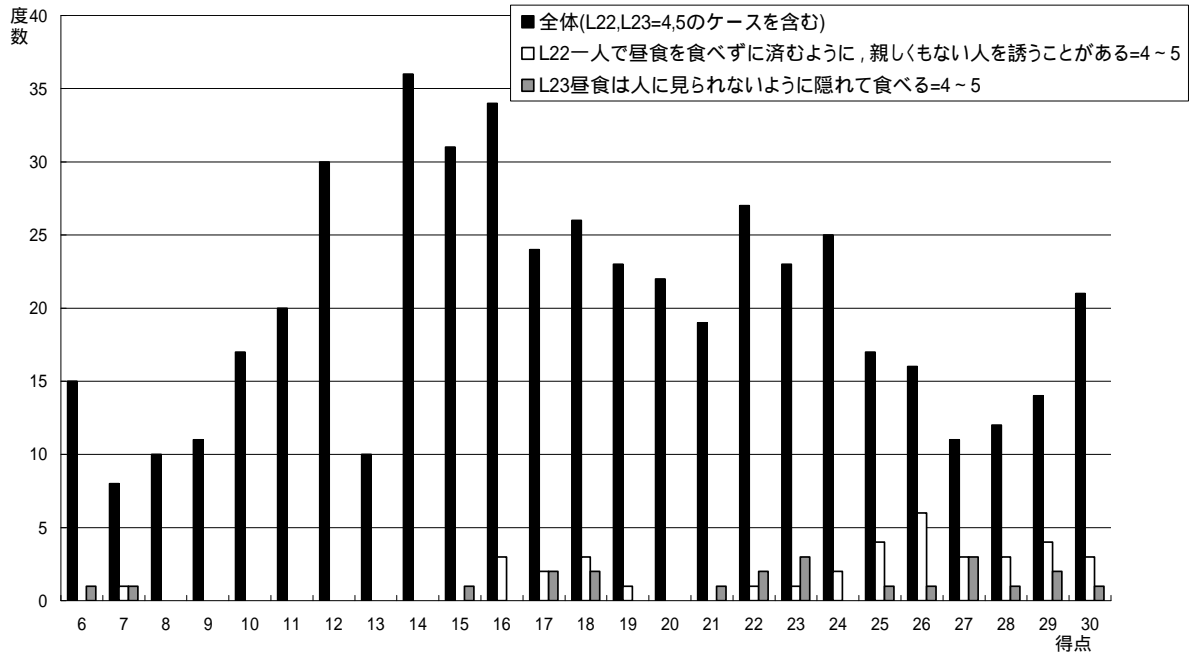


Figure1 ランチメイト症候群尺度得点度数分布

ただし両項目の相関は  $r=.192$  と低く散布図(Figure2)からも一方だけが低い回答者が見られることから、両者は必ずしも同じ側面を測っているわけではない可能性が考えられる。

親しくもない人を誘う

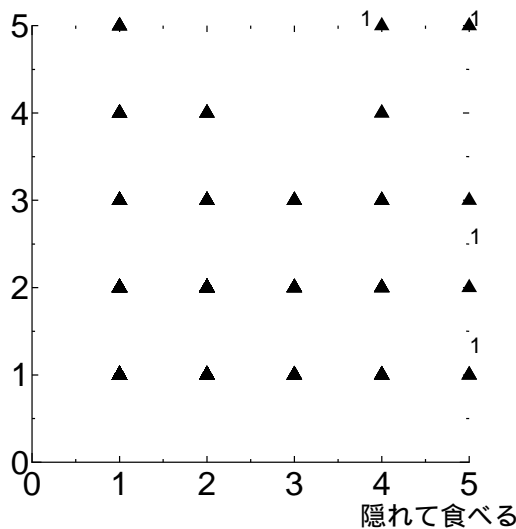


Figure2 除外項目の項目得点の散布図 (プロットに1とあるものは1名のみの反応)

註:本研究のうち「傷つけ尺度」「ふれ合い恐ろしい心性尺度」については他の変数との関連に関しては、日本教育心理学会第 53 回総会(2011)「現代青年の友人関係とふれ合い恐ろしい心性 再考」で発表されたものと共通のデータを使用している。

本研究は科学研究費補助金 基盤(C) 課題番号 20530589「現代青年の友人関係・自己のありかたと社会適応に関する研究」の一部として実施された

## 引用文献

- Fenigstein,A.,Scheier,M.,& Buss,H. (1975).Public and private self-consciousness:Assessment and theory. *Journal of consulting and clinical psychology*,43,522-527.
- 町澤静夫(2001).ランチメイト症候群について 学校保健のひろば 23 大修館書店 84-87.
- 岡田努(2011a).自己愛と現代青年の友人関係 小塩真司・川崎直樹(編著)自己愛の心理学——概念・測定・パーソナリティ・対人関係 金子書房 pp.184-200.
- 岡田努(2011b).現代青年の友人関係と自尊感情の関連について パーソナリティ研究,20,11-20.
- 岡田努(2012).現代青年の友人関係に関する新たな尺度の作成 : 傷つけ合うことを回避する傾向を中心として 金沢大学人間科学系研究紀要 04,19-34.
- 佐藤静香・畑山みさ子(2002).女子大学生の昼食時間への不安に関する調査研究—ランチメイト症候群検証の試み—宮城学院女子大学発達科学研究 2,81-87.
- 菅原健介(1984). 自己意識尺度(self-consciousness scale)日本語版作成の試み 心理学研究,55,184-188.
- 辻大介(2009).友だちがいないと見られることの不安 少年育成,54,大阪少年補導協会 26-31.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子(1982).認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究,30,64-68.